

# 岡崎城下における宗教建築の歴史地理的考察

張 旭

## I. はじめに

都市の起源、繁栄、衰退、そして消滅への循環は、人類の文明と社会の発展と密接な関係がある。世界中の都市の形態と発展は、それぞれ地域の政治、経済、文化、自然環境などの多くの要因の影響を受けているが、これは人間が都市のような空間構造を組織して生産効率を改善し、生活のペースを加速させ、人と人の交流を促進していったことの現れである。これによって貿易がより便利になり、経済がより繁栄し、宗教、文化、科学技術の分野で質的な飛躍がもたらされた。したがって、都市の歴史は人類の文明と社会の発展と密接に関連している。そのため都市の発展で遭遇する多くの問題は、人類の文明と社会の発展が直面する課題と言える。

周知のように、日本の都市の起源は、世界中の都市と同様に、集落から始まる。中世においては、城を中心とした城下町や有力な寺院を中心とした門前町が徐々に発展し、各地域において経済、文化の中心を形成した。これらは、各地域の交通の中核にあり、周辺の農村部の住民が徐々にここに定住することになった。近代になると西洋文明が日本に合流し、元々の都市の基盤の上に近代都市を確立した。手工業など都市の多くの伝統的な産業は徐々に衰退して、金融、商業、飲食業など多くの新興産業が徐々に出現していった。武士階級は衰退し、城下町も次第に近代都市の中心市街地になった。城下町の中心部にあった城や武士の屋敷は多くが、市役所、学校、病院、市民会館などの公共施設で占められていった。都市景観を構成する道路や建物も、産業構造の変化や建設技術の進歩とともに変化を遂げた。近代から現代にかけては多くの近代建築が街中に出現した。大日本帝国時代にヨーロッパから導入された洋風の建築や、科学技術のセンスを備えた現代ビルが多数建設されたが、それだけでなく現代の都市景観を構成する重要な要素の1つとして、比較的伝統的な建築群にカテゴライズされる宗教建築が今日に伝えられていることも無視できない。人類の文明と社会の

高度な発達とともに、生活環境の利便性、経済性、新技術への追求とともに、伝統的な歴史文化に対する人々の需要も高まってきたためである。今日では、伝統的な歴史文化の要素が画一化均一化された各々の現代都市の景観を差別化し、都市の価値を向上するために不可欠なものになっている。しかし、20世紀後半、歴史的建造物は近代都市の発展への障害と見なされていた。戦災や火災に加えて開発の中で多くの歴史的建造物が取り壊され、元の都市景観が破壊されたため、多様化していた都市景観は平板退屈な方向になる傾向になっていった。鉄筋コンクリートの都市の森は徐々に現代の都市景観の主流になりつつあるが、それだけに伝統的様式を墨守する瓦葺の寺院と茅葺の神社は、都市景観の中でますます人の目を奪う存在になっている。

前述のように、日本の現代都市の歴史的建造物には、伝統的様式を受け継ぐ宗教建築のみならず、時代の痕跡を表す帝国建築、日本と西洋のスタイルが混在する「和洋折衷」の住宅も含まれる。これらの建造物は日本の現代都市の景観に多様性を加える。東京や大阪の街を歩いていると、高層ビル間に神社や寺院が隠れている姿を偶然に見つけることができる。モダンとクラシックの建築風景が相呼応しているのは一見して少し突然だが、じっくり味わえると都市の風情を感じる。このような光景は、古代日本に戻ったような時空錯覚を与えて、これによって日本の街を歩いていることをすぐに思い出させることもできる。現在日本の都市の主流は鉄筋コンクリートの森だが、独特な歴史的建造物の要素は常に都市の景観の多様性と歴史性を思い出させる。ただし、すべての日本の都市が大阪の淀屋橋の近くにある旧日本銀行のような帝国期の建造物を持っているわけではない。むしろ日本全土に圧倒的数で蓄積され、それぞれの都市景観を彩っている歴史的建築物は、宗教建築である。

このように、都市の宗教建築は都市景観を構成する不可欠な要素であるため、どのように保護し継承

するかは都市開発者と私たち一人一人が直面する重要な課題となっている。本論では、日本の地方都市である岡崎市の例を挙げて調査対象地域の自然的環境と人文的環境の概要を説明し、日本の都市における岡崎市の重要な位置を明らかにする。そして、絵図における岡崎城下の宗教建築の分布状況と特徴を明らかにする。また、各時期の地形図における岡崎城下の宗教建築の分布状況を把握しながら宗教建築の変遷とその要因の検討を試みる。最後に、歴史都市北京と比較しながら、宗教建築が都市景観の構築に及ぼす影響と重要性を考察する。

## II. 研究地域の概観

岡崎市は歴史的には三河国の中心部に位置し、現在は愛知県のほぼ中央、名古屋市の南東に位置している。京都と江戸を結ぶ東海道沿いにあるため、城下に岡崎宿と東の藤川宿が設立され、古くから東西を結ぶ重要な交通の要衝となっている。日本は近代化への道を歩み始めた後、名古屋大都市圏が形成され、岡崎は次第に西三河地方の中心都市となった。伊勢湾経済交流圏にも近く、矢作川と乙川流域に広がる平野部にある。江戸時代から今日まで岡崎市は交通の要衝であり、JR 東海道線、名鉄名古屋本線、愛知環状鉄道が東西、南北に通っている。東名高速道路、国道1号、248号、473号が縦貫して道路交通の利便性も高い。

今回の調査対象地域は岡崎市全体ではなく、旧岡崎城と城下町の範囲を調査対象地域とする。なぜなら、岡崎市は地方都市として岡崎城とその城下町、宿場町を中心に発展した歴史があるからである。岡崎城は江戸幕府を創設した将軍徳川家康が誕生した城であり、その歴史的意義はいうまでもなく重要である。今日まで岡崎城は岡崎市のシンボルでもあり、岡崎市の歴史文化的風情を象徴している。中世後期の岡崎城の建立から現代に至るまで、岡崎城とその城下町、宿場町は当地方の政治・経済・文化の中心地となった。さらに、信仰を具現化した大小の寺社も城下町に住む人々と共存している。仏教は朝鮮半島を経由して中国から日本に伝わって以来、江戸時代になると仏教の仏事、思想、信仰はすでに確実

に日本人の心の底に根ざしていた。明治維新以前は、日本の仏教と神道教は「神仏習合」のため、本来相異なる教義・教理を結合また折衷することにより仏陀と神はあまり明確ではないと認識されていた。これに基づいて、寺院や神社の立地の選択も非常に味深いもので、両方とも同時に立地する比率が高い。岡崎城下にある寺院や神社の分布も混在している。

また、調査対象地域としてはもう一つ重要な理由がある。岡崎城下の寺社建築が、城下町自体の発展と密接に関連している点がそれである。近代都市の発展においては、前近代都市の中心的要素であった寺社建築が都市景観の変化に及ぼす影響も重要である。岡崎市のような旧城下町、宿場町の近代化への道においては、特定の歴史時期を除いて、寺社建築を考慮に入れる必要がある。

明治初年に起こった「廃仏毀釈」運動は約3年間しか続かなかったが、「文明開化」の原則に従って城と宗教建築などの歴史的建造物は旧時代の遺物と見なされていた。多くの宗教建築、特に明治維新を導いた薩摩藩では宗教建築の損傷が甚大であった<sup>1</sup>。都市の近代化を加速するために競い合った。この時期に近代都市の建設を妨げていた宗教建築が大量に破壊された。九州南部にはもはや歴史のある大規模な寺院が存在しないようになっている。明治4年から政府はこれまでの政策を反省し、近畿地方を中心に文化財の歴史的・文化的保存の現状を調査し始めた。その後、明治30(1898)年に、寺社に対して『古寺社保存法』が公布された。それ以来、法律や政策は徐々に改善され、歴史的文化的財が保護されてきた。保護の対象には、歴史的建造物も含まれる。

前述の薩摩藩と対照的に岡崎市が所属する愛知県は、日本で最も宗教建築の保有数が多い県であり、数量面では京都や奈良を上回っている。浄土真宗の信仰が強い三河国(愛知県東部)や越前国(福井県北部)では廃仏の動きに反発する護法一揆が発生しているが、それを除けば全体として大きな反抗もなく、明治4(1871)年頃には終息した<sup>2</sup>。民衆の反抗は愛知県の宗教建築を壊滅の運命から救い出した。また、愛知県は近畿地方と江戸の中間に位置するた

<sup>1</sup> 鶴飼秀徳『仏教抹殺』p.54-56、文藝春秋、2019。

<sup>2</sup> 尾鍋輝彦『大世界史 第19巻 カイゼルの髭』p.36、文藝春秋、1968。

め、旅人や僧侶が各地から訪れることによって様々な宗教思想の影響を強く受けている。京都と奈良は歴史上動乱や遷都を繰り返され、織田信長による京都の延暦寺の焼却事件もある。一方、愛知県は比較的安定し、三河一向一揆などもあったが全体として宗教建築を破壊する事件はほとんどなかった。愛知県は京都と江戸二大政治中心地の間に位置しているため、都市の荒廃による災害や宗教建築の損傷を避けながら、東西の豊かな文化や宗教思想を吸収することができる。以上述べたようにこれらは今日愛知県が最も歴史的、宗教的、文化的な建造物をうまく保有できる理由である。

最後に、岡崎城、城下町、その周辺に調査対象地域を設定したもう一つの理由は以下のいくつかの参考対象により決定されている。1つ目は、岡崎城と城下町を参照対象とすることである。2つ目は、旧東海道が城下町を通過する際に放射範囲を参考にすることである。3つ目は、岡崎宿とその放射範囲を参考にすることである。4つ目は、矢作川と乙川流域を参考にすることである。5つ目は、岡崎城の北にある徳川家菩提寺を参考にすることである。そのため、調査対象地域は図1のように5つの地域に分かれ、東西に流れる乙川の南北岸辺から東海道までの岡崎城と城下町を含む部分は第1号エリアである。そして、東海道の北から伊賀川南東まで岡崎城東北の高地を含む部分が第2号エリアである。また、矢作橋、国道1号の北から日本橋、県道56号まで、矢作川の東から伊賀川の西までの部分を第3号エリアにする。また、日本橋、県道56号の北から岡崎大橋、県道26号まで、矢作川の東から県道26号と56号が合流する所までの部分を第4号エリアにする。最後に岡崎大橋、県道26号の北から矢作川まで、矢作川の東から松橋町の西までの部分が第5号エリアにする。全体から見ると調査地域は、矢作川、乙川、伊賀川などの自然河川と、東海道、国道1号、県道56、26号の放射地域によって分けられている。筆者の想定によれば第1号エリアは岡崎城とその城下町の中核である。通過する東海道は間違いなくこの地域の政治的中心地であり、最も繁栄している地域でもある。第2号エリアには西から東に岡崎城北門通り、県道56号、東側の高地がある。高地は岡崎城下全体を見渡せる。広い土地空間を提供し、宗教建築が集中する場所となる可能性がある。第3号

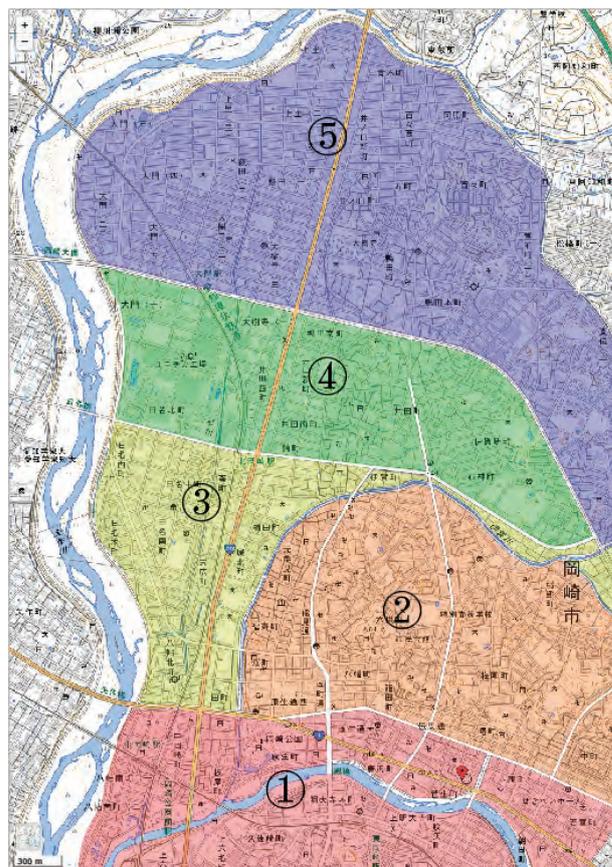


図1 岡崎城下研究対象地域（筆者加筆）

エリアは矢作川と伊賀川に挟まれ、南北は国道1号と県道26号に挟まれている。国道は明治維新時代に建設されたため、筆者はこの場所は江戸時代、あるいは、江戸時代以前から農地と民家であったことを推測している。第4号エリア、矢作川と県道26、56号に挟まれ、早川は南北に縦貫する。このエリアは江戸時代とその以前の時代も城下町や宿場町の経済的に繁栄した地域から遠く離れていた。筆者は、ここは農地の広い地域であり、水資源が豊富であるべきだと考えている。そのおかげでこの辺りの農業の発展にも貢献している。第5号エリアは岡崎城と城下町から最も離れているところであるが、ここには徳川家の菩提寺大樹寺があり、昔この用地の多くは寺領と農地であったと推測している。

以上述べたように、筆者は岡崎城下の概観と地理的条件の優位性と重要性を述べた。そして愛知県の宗教建築の保有数は日本における支配的な位置を占めていることとその理由を説明した。また、研究対象地域の分割、その理由、筆者の推論についても説明した。次章は、岡崎に関する絵図における宗教建築の記録を比較しながら宗教建築の分布状況を考察

する。

### III. 絵図における宗教建築

近代的製図技術が登場する前に幕府の命により各地の藩主の居城、城下町、宿場町に関する多くの絵図が描かれていた。これらの絵図は、当時の山川地理や戸籍農地を記録し、領主が領土の状況を把握するための重要な参考資料であった。今日では歴史地理学者にとって当時の風景を研究する貴重な地図資料になっている。現代のコンピュータ技術の急速な発展により、一般の研究者は家を離れることなくインターネット上で高精細のアーカイブを利用することができる。

筆者は、インターネットで公開されている各時期の岡崎城の既存の絵図アーカイブを利用し、現在の地図と比較しながら絵図の宗教建築に印を付け、岡崎城下の宗教建築の分布状況を明らかにした。各時期の分布状況は以下のとおりである。

『正保城絵図』は、正保元（1644）年に幕府が諸藩に命じて作成させた城下町の絵図である。国の軍事要塞を把握することによって大名を支配し、幕府の権威を示すことが目的である。当時、157部の城図が提出され、江戸城の紅葉山文書館に保管されていた。その後、国立図書館に継承されたが、63部しか継承されていなかった。その後、62の絵図のデジタル版がインターネット上で公開された。『正保城絵図』は昭和61（1986）年に国の重要文化財として認められた。しかし、アーカイブを閲覧すると岡崎城の絵図がなく、失われたか、あるいは民間に散らばっているかと推定される。国立公文書館に

受け継がれていないようである。将来的には、この絵図を見つけ、研究者が研究できるように公開できることを願っている。

『日本古城絵図』は、鳥羽藩主稲垣家が寛保十（1725）年から明治維新まで収集した古城の絵図である。軍事研究資料として編集されたものである。約350点があり、城下町を含む城の絵図と古戦場の絵図が混在して分類されなかった。また、一部の絵図は重複している。重複したものを除いて約220点が残し、後に畿内七道と旧国名によって23冊に分類される。岡崎城とその城下町の絵図が3枚あり、そのうち最も詳細な1枚が図2-1のように、岡崎城の北門近くにある「大林寺」、北門に「松応寺向き」、北東の高地にある「甲山六坊」の3か所の宗教建築に関する文字が記載されている。もう1枚の略図には、宗教建築が表示されていないが、図の横に（図2-2）「浄土宗寺廟帰山無量寺」の記録がある。この記録によって帰山無量寺はこの時点で存在していたことがわかる。しかし、今の地図上で帰山無量寺はみつからないため、消失したかもしれないと考えられる。3枚目の絵図は、より優れた技法で明確な詳細を描いたが、製図年代は今より近いものであると推測できる。しかし、宗教建築の記載はない。

『扶桑城図記』は製図年代が不明であり、全国の城郭図を収録した『主図合結記』か、またはその写しであると推測される。『扶桑城図記』は畿内七道に合わせて10冊に分けられた143点の絵図が収録されている。アーカイブで日本列島の南北9部に分かれて公開されている。筆者は公開の絵図資料を参照したが、関連する宗教建築の記録は見つからなかった。

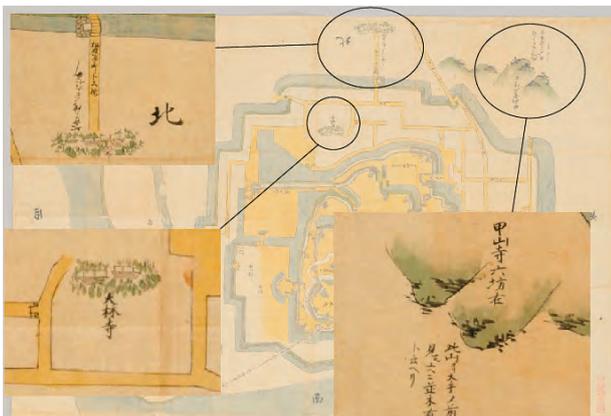


図2-1 岡崎絵図における宗教建築  
（『日本古城絵図』筆者加筆）

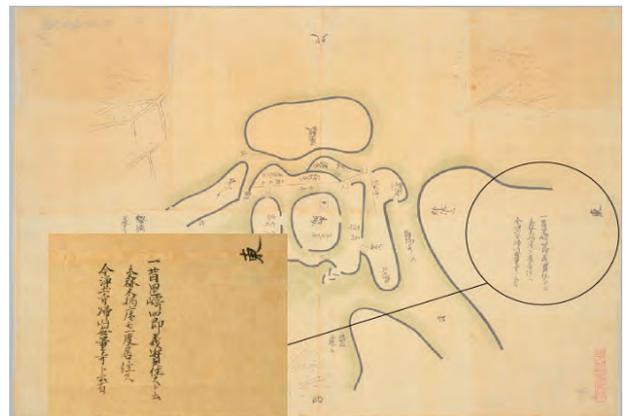


図2-2 岡崎絵図における宗教建築  
（『日本古城絵図』筆者加筆）

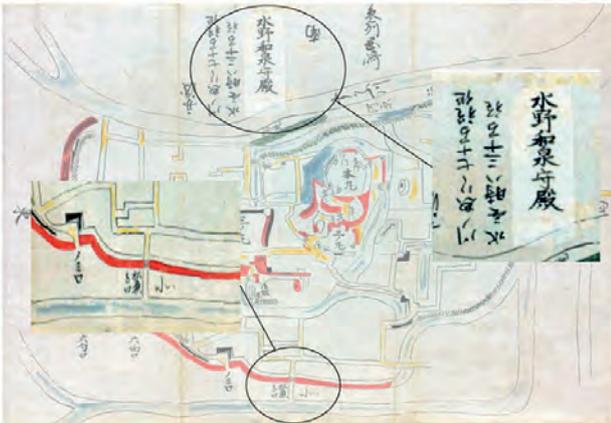


図3 岡崎絵図における「水野和泉守殿」と「松応寺」  
 (『諸国城之図』筆者加筆)

『諸国城之図』は製図年代が不明であり、同じく『主図合結記』の写しでもあると推測される。『諸国城之図』には、畿内七道に合わせて8冊に分けられた119の絵図が収録されている。『扶桑城図記』に比べると常陸、下総、武蔵、信濃、美濃、近江の絵図が欠けている。筆者は、岡崎絵図(図3)に「水野和泉守殿」の文字を発見した。これによってこの絵は水野領主の時代に描かれたものであることがわかる。『岡崎市史』第2巻(1926)には、水野藩時代末期(図4-1)2つの絵図が収録されている。『扶桑城図記』の岡崎絵図と比較すると、後者より技法がおおざっぱで前者は水野藩初期の岡崎城絵図であると推測できる。城下町の土地利用の記録は詳細ではない。ただし、この図には「松応」という文字がまだ残っている。この時点で松応寺も存在することを示している。

図4-1のように「岡崎市史」(1926)に収録され

た水野藩時代末期の岡崎城の絵図では、明神(三嶋神社)、龍海院、万徳寺、六所神社、安心院、成就院、スハ(諏訪神社)、光円寺(光圓寺)、白山(白山神社)、持仏堂、天王、白山(白山神社)、十王(十王寺)、大林寺、満性寺、総持尼寺、専福寺、善立寺、西照寺、十王(十王寺)東側、円頓寺、随念寺、宝福寺、誓願寺、天神(岡崎天満宮)、興蓮寺、多宝坊、定光坊、十輪院、八幡(甲山八幡宮)、東円院、薬師(薬師寺)、密祥房(密祥坊、消失)、花蔵房(花蔵坊、消失)、源空寺、覚恩寺、松応寺合計37(付表1を参照)の手書きの文字が描かれている。また、図4-2のように「岡崎市史」(1926)にも収録されている本多中務大輔時代の絵図では、明神(三嶋神社)、龍海院、万徳寺、六所神社、安心院、成就院、スハ(諏訪神社)、光円寺(光圓寺)、白山(白山神社)、持仏堂、天王、白山(白山神社)、十王(十王寺)、大林寺、満性寺、総持尼寺、専福寺、善立寺、西照寺、十王(十王寺)東側、円頓寺、随念寺、宝福寺、誓願寺、天神(岡崎天満宮)、興蓮寺、多宝坊、定光坊、十輪院、八幡(甲山八幡宮)、東円院、薬師(薬師寺)、密祥房(密祥坊、消失)、花蔵房(花蔵坊、消失)、源空寺、覚恩寺、松応寺、天王(西)、勝蓮寺、クンオン(消失)、地藏、朝日(消失)、薬師(城内)、ケイ雲寺(消失)、若宮(若宮神社)、大泉寺、極楽寺、観音寺、神明(能見神明宮)、庚甲(消失)、永泉寺、愛宕(消失)、栄え寺(消失)、伊賀八幡合計54(付表1を参照)の手書きの文字が描かれている。

『日本城郭史資料』は、旧日本軍陸軍本部築城部が大正初期から資料収集を開始したものの、世界情



図4-1 水野時代末期の岡崎城下における宗教建築  
 (『岡崎市史』収録、筆者加筆)



図4-2 本多中務大輔家時代の岡崎城下における宗教建築  
 (『岡崎市史』収録、筆者加筆)



図5 岡崎城下における宗教建築（『日本城郭史資料』「三河岡崎城」筆者加筆）

勢の変化によって陸軍築城部がこの作業を継続できなくなったため、1945年の敗戦まで資料収集の段階にとどまる。今日、地域ごとに42冊をまとめてそのうち6冊は著作権の理由で出版できず、残りの36冊はインターネット上で公開資料として閲覧できる。資料には絵図だけでなく解説文も含まれている。図5のように岡崎城と城下町では、三島明神(三嶋神社)、竜海寺(龍海院)、大明神(六所神社)、明神(消失)、白山(白山神社)、天王(地蔵)、宗持寺(東へ移転、今は西岸寺)、寺(今は老人ホーム)、西性寺、寺(岡崎市役所)、随念寺、宝福寺、誓願寺、多宝坊(岡崎市民会館)、定光坊(岡崎市民会館)、極楽坊(秋葉堂)、寺(甲山寺)、寺(薬師寺)、寺(消失)、寺(一乗寺)、密祥房(密祥坊、消失)、花蔵房(花蔵坊、消失)、寺(源空寺)、寺(消失)、寺(覚恩寺)、永泉寺、覚堅院(消失)、大林寺、松応寺、明神(能見神明宮)、八幡(伊賀八幡)合計31(付表1を参照)の手書きの文字が描かれている。

#### IV. 宗教建築の分布と変遷

各時代の絵図における岡崎城下の宗教建築の分布状況を把握した後、明治維新から現在までの地形図における宗教建築の分布状況を把握することを試みたい。筆者は国土地理院が発行した岡崎市の地形図と埼玉大学教育学部の谷謙二教授がインターネット

上で公開した「今昔マップ on the web」アーカイブを組み合わせた資料に基づいて明治以降の各時期の岡崎城下における宗教建築の分布状況を復原した。

まず、明治期(1888-1898)の2万5千分の1の地形図を選択し、前述の『今昔マップ』アーカイブを利用し、色別標高地図を作成する。図6に示すように、ほとんどの宗教建築は岡崎城とその周辺の城下町に集中しており、岡崎市の発祥地である南部に集中している。北へ行けば行くほど数が少なくなる。そして、北部への宗教建築は東部高地の麓に走った道路(現在の56号)に沿って分布している。道路の両側は町屋である。東は高地であり、西は農地である。この時期の宗教建築の分布の特徴は生活居住区である町屋の周辺に集中することと言える。北部の八剣神社も小さな村に位置している。だが、例外もある。東部高地の稲前神社は居住区から遠く離れた場所にある。右下の拡大図は南部である。黒い部分の岡崎城下町の裏側に宗教建築が多く分布している。幹線道路の方向に配置されていることがはっきりとわかる。この図から見ると宗教建築が住民生活から切り離されてはならず、共生共存している。また、この時期の乙川南岸には住民生活の町があり、龍海院や六所神社などの宗教建築の規模も小さくはない。左の拡大図は中部である。中部の宗教建築の分布も当時の岡崎市北部の幹線道路沿いにあり、建



図6 明治期（1888-1898）岡崎城下における宗教建築の分布（『今昔マップ』利用、筆者作成）

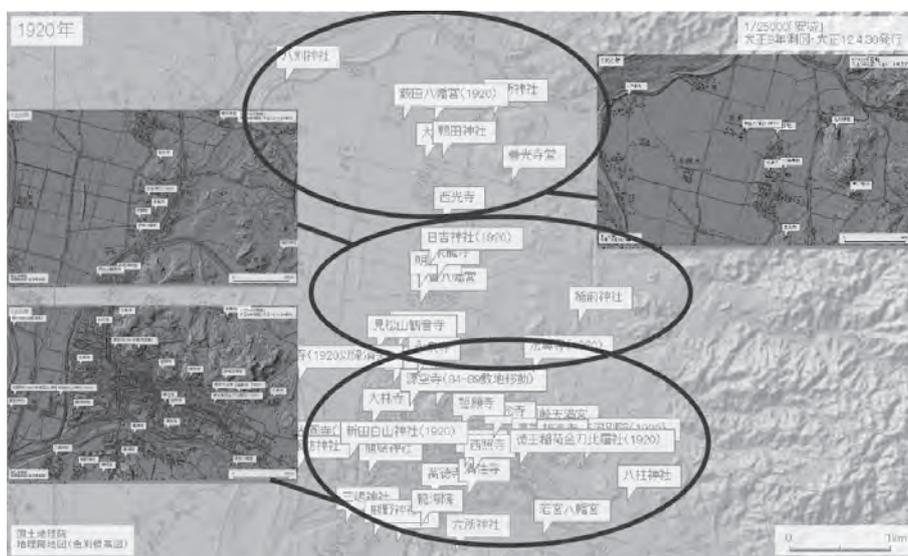


図7 大正期（1920）岡崎城下における宗教建築の分布（『今昔マップ』利用、筆者作成）

設用地が必要なため主に道路の西側の平野に分布して農地につながっている。右上の拡大図は北部に主な住宅地が徳川家菩提寺周辺に開発されている。東の七所神社の麓には家屋がいくつかあり、道路西側の農地に点在している村がいくつかある。図上にこれらの村には宗教建築がないが、筆者はいくつかの小さな村社があるかもしれないと推測しているが、この時期に地形図にマークされていなかったに過ぎないと考えられる。

1920年大正期の2万5千分の1の地形図では、筆者は上記の方法で宗教建築の名称と場所をマークした。図7に示すように、東海道に点在する宗教建築の数はわずかに増加し、分布の特徴は上記と同じ

く町、住宅地、幹線道路沿いに分布している。幹線道路は主に東海道と東高地西側の麓に走っている道路を指す。左下の拡大図は南部を示している。町の住宅数は大幅に増加し、乙川南岸の市街地も徐々に形成されてきた。宗教建築の数は増加していなかった。左上の拡大図のように、中部に新たな徳王稲荷金刀比羅社が追加された。右の拡大図のように北部の宗教建築の数は明治期と同じく増加はなかった。

その後、戦争や動乱などの理由で1932年、1937-1938年、1947年の2万5千分の1の地形図は『今昔マップ』で見つからなかった。1920年直後は昭和期（1959-1960）の地形図である。図8に示すように、宗教建築の数が大幅に増加し、西部農地には

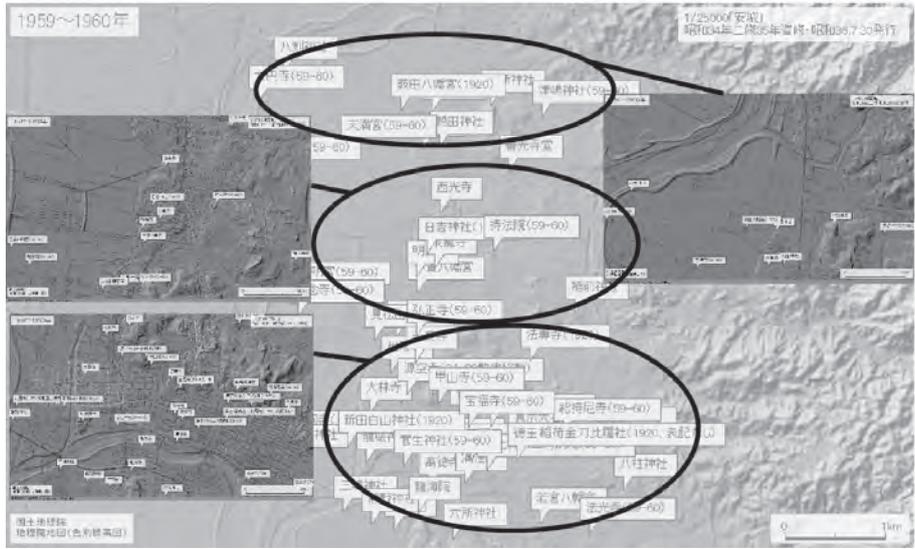


図8 昭和期（1959-1960）岡崎城下における宗教建築の分布（『今昔マップ』利用、筆者作成）

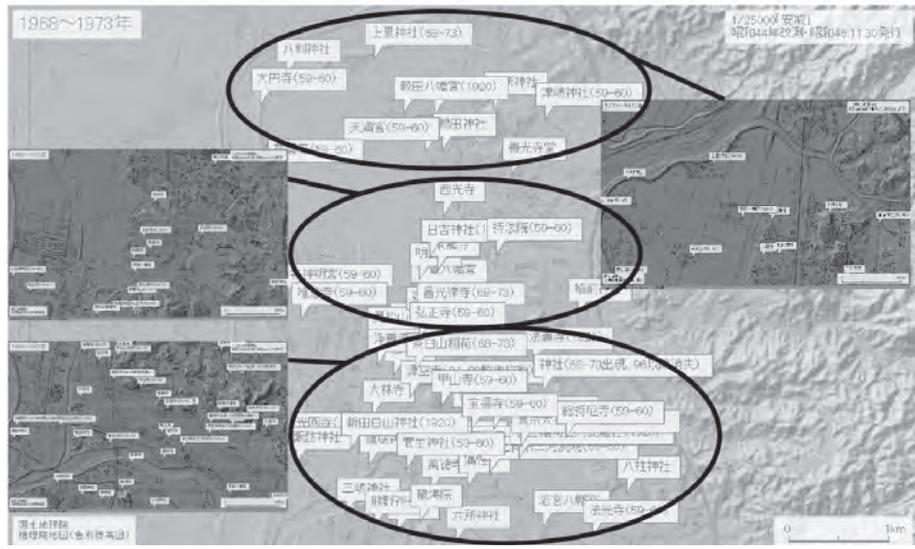


図9 昭和期（1968-1973）岡崎城下における宗教建築の分布（『今昔マップ』利用、筆者作成）

大円寺、慈雲寺、天満宮、日名神明宮、唯念寺が追加された。左下の拡大図のように南部に浄土真宗三河別院、新田白山神社、甲山寺、弘正寺、極楽寺、宝福寺、随念寺、菅生神社が表記されている。左上の拡大図のように中部には、天満宮、慈雲寺、日名神明宮、唯念寺、持法院、持法院が表記されている。右の拡大図のように北部に大円寺が表記されている。昭和期（1959-1960）の地形図を大正期（1920）の地形図と比較すると宗教建築は上記の寺社が増加されている。しかし、『岡崎市史』に収録された『水野図』と『本多図』における宗教建築に比べるとこの時代の多くの宗教建築は地形図に記されていない。例えば、西の矢作川近くの光円寺と諏訪神

社は図上に反映していたが、1920年以降の地形図にマークされていない。これによって明治以降の地形図にマークされた宗教建築の情報は漏れる可能性があると言える。一方、今の時点に近づけば近づけるほど地形図に表記される宗教建築の情報は最も詳細であり、漏れる可能性が低い。

昭和期（1968-1973）の地形図（図9）では、マークされた宗教建築の数が大幅に増加し、西部の農地のほとんどが徐々に都市化されて町になった。西部の北部が経済中心の南部から遠く離れているので、まだ大量の農地が残り、都市化が完全ではなかったことがわかる。左下の図は南部の拡大図である。この時期に記された宗教建築は、浄専寺、茶白山稲荷、

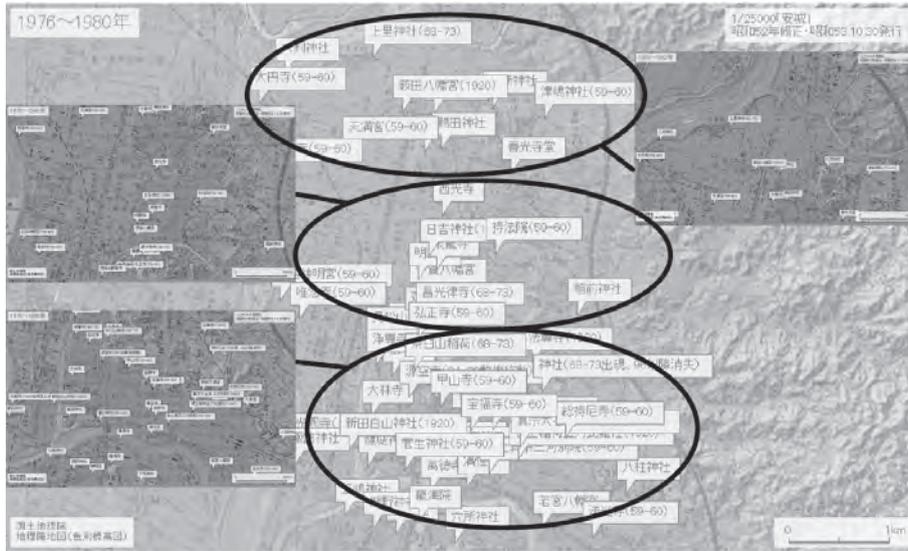


図10 昭和期（1976～1980）岡崎城下における宗教建築の分布（『今昔マップ』利用、筆者作成）

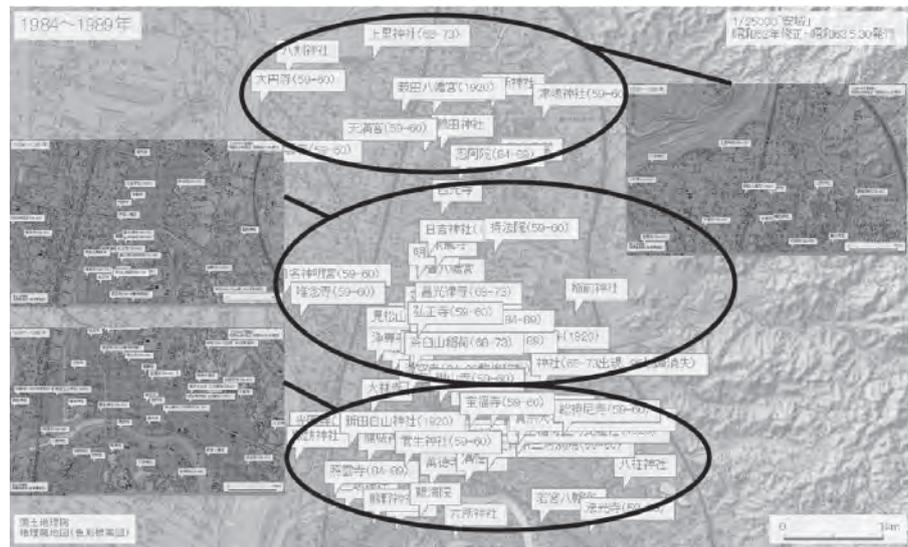


図11 昭和期（1984～1989）岡崎城下における宗教建築の分布（『今昔マップ』利用、筆者作成）

北東高地の神社である。この神社はこの時期に登場したが、1996年以降の地形図に消失してしまった。現在の地図と比較すると、この場所を通る道路があることがわかる。道路建設の時に取り壊されたと推測される。左上の拡大図は中部を示している。新たに表記された宗教建築は蓮馨寺と昌光律寺である。数はそれほど増えていなかった。さらに北へ行くと、右の拡大図のように上里神社が目立ち、周辺の村は前の地形図よりも面積が大きくなった。この地は村落を先に形成してから村社が建てられたことを推定できる。

昭和期（1976～1980）の地形図（図10）では、矢作川西岸の町が徐々に形成され、東岸の元々の農地

が徐々に市街地化された。岡崎地域全体の都市化が加速した。左下の拡大図のように南部を見ると町は更に都市化されているが、新しい宗教建築はなかった。また、中部と北部の拡大図を確認したところ、筆者は新しい宗教建築を発見しなかった。

昭和期（1984～1989）年の地形図（図11）では、急速な都市化が見られる。左下の拡大図のように南部に記されている宗教建築に照雲寺が追加された。左上の拡大図のように中部に新たに記されているのは、松林律院、善光寺、岡崎別院、能見不動尊、貞寿寺である。右の拡大図のように北部に忍阿院が追加された。

平成期（1992～1996）の地形図（図12）は、岡崎







図15 清代北京城の範囲  
 (『北京古建築地図集』2009、に基づいて筆者加筆)

と八か国連合軍との戦争と正陽門駅の建設によって北京の城壁は部分的に損傷した。1912-1949年、北洋政府と民国政府は城壁にいくつかの変更と修理を行ったが、都市景観はあまり変化していなかった。1949年以降、道路や地下鉄の市政建設のため、北京の城壁は1966年まで徐々に取り壊された。現在、北京の「二環路」(環状線)(図15を参照)は基本的に旧北京城の城壁と同じ位置を占めている。北京市の都市景観は600年以上の変化を経て、ようやく今日の姿になった。城壁はなくなったが、旧市街地の地割は地図上にかすかに見えている。無論100年間の洗礼を受けて保存されている宗教建築はまだ多数残っている。

筆者の学位論文では、北京の宗教建築に関連する諸問題を議論した。1750年『乾隆京城全図』における宗教建築の分布状況の復原によって乾隆時代から1949年まで、北京には約1000以上の宗教建築があった。しかし、道路建設、地下鉄建設、旧市街の再建により近代都市の建設で破壊された宗教建築を除いて現在の北京における既存の宗教建築を数えると、その数は100超で、元の数の10%に過ぎない。1966-1976年の「十年動乱」の期間中に多くの宗教建築が破壊された。当時の宗教建築は旧時代の遺物と見なされていた。宗教建築自体の文化的価値を認識できなかったため、それに対する廃棄や破壊の行

為が政府や国民に重視されていなかった。1978年の「改革開放」政策が実施した後、経済は急速に発展し、政府と国民は精神文化への追求が日々高まっている。北京は歴史都市としてその文化的な面は徐々に再び国民に認識されていた。1980年代後半、学界の要請によって政府は文化財や史跡の保護を強化し始め、1982年11月19日に『中華人民共和国文物保護法』が正式に施行された。2008年の北京オリンピック以降、北京の歴史的・文化的な風情と価値を早急に掘り出して保護する必要があると認識された。2015年と2017年頃に『文物保護法』の4回目と5回目の改訂が行われた。

現在の北京市における宗教建築の分布の特徴は、筆者の学位論文で詳細に議論され、都心部(内城)には主に大規模な仏教寺院、道教の観、カトリック教会、民間信仰の廟宇が分布している。外城には主に小規模な宗教建築があり、そのほとんどは民間信仰の廟宇である。ここでの規模は、土地の面積と複合建築物群の規模を指している。2010年に、北京の中心市街地の行政区画が変更され、元の都心部の東城区と南の崇文区が新しい東城区に統合され、都心部の西城区と南の宣武区が統合されて新しい西城区が形成された。北京市内の中心部の胡同(フートン、狭い道路)、地割、中軸線、宗教建築などの歴史的建造物を保護して修復することが決定された。それ以上取り壊し続けることをしない。その目的は歴史都市の文化的価値と都市景観を構成する重要な要素である宗教建築の文化的意義を認識した上で、歴史的建造物、地割、既存の都市景観を維持することである。

以上述べたように、岡崎市と北京の宗教建築への保護には、次のような共通点がある。まず、両方はどちらも歴史的都市である。都市の形成への道においては、住民の増加と都市の発展に伴い、信仰の担い手である宗教建築の数と規模は時間の流れにしたがってますます多く、大きくなっていく。第二に、両都市の近代化への道を歩み始めた頃、都市の宗教建築や歴史的建造物が見下された時期があった。市政建設の理由で宗教建築が取り壊された。第三に、歴史的建造物の文化的価値を徐々に国民に認識してから保護しはじめ、現代都市に統合させる。その価値を発揮し続け、都市の風情を添える。

一方、次のような相違点もある。第一に、両都市

の規模が異なる。宗教建築の数と直面する問題の数も異なる。ただし、本論で議論した問題は、都市再開発時に直面する苦境が一般的であるため、実際にはあらゆる規模の歴史的都市での議論に適している。第二に、日本で行われた「廃仏毀釈」運動は、比較的短期間で約3年間しか続かなかったが、中国では1956-1976年の20年間が続いた。そのため、この影響をうけて北京の都市景観は大きく変化した。この点から見ると、岡崎をはじめとする日本の歴史都市は幸運であるが、例外もある。九州南部鹿児島島の宗教建築の被害が大きかったことは前述した。第三に、日本は明治期以来宗教建築や歴史的建造物の文化的意義と価値を認識し始め、法律も今日まで比較的完備している。日本と比較すると中国はこの点でまだ長い道のりがある。都市景観と歴史的文化財を保護するための日本の努力は、中国の参照と学習対象として非常に価値があると考えられる。

## VI. おわりに

本論では、インターネット上で公開されている絵図のアーカイブ、国土地理院が公開した地形図、『今昔マップ』閲覧サービスなどを利用して現地調査を合わせて岡崎城下における宗教建築の分布状況と変遷を明らかにした。地形図に記されていた宗教建築の比較によって市政建設で姿を消した寺社や居場所が変わった寺も発見した。そして、地形図上に記されている宗教建築情報は時代によって製図表現上の誤差があると明らかにした。また、岡崎城下における宗教建築の分布の特徴は、主に東海道や城下町、岡崎宿を縦貫する幹線道路に沿って散在していることを明瞭にした。最後に、北東の高地にも神社がいくつかあるが、神社は主に村が点在する場所に建てられている。岡崎城下の神社と寺院の数を比較すると神社よりも寺院の方がはるかに多いことがわかる。

日本の歴史都市は中国より先に近代化への道を歩み始めた。各保護事業や保全政策や法律も完備されている。日本は歴史都市の景観への保護は住環境の

改善と文化遺産の継承にも重要な役割を果たしている。一方、現在の中国は全国の巨大都市の再開発が一時的に完結し、都市の歴史的、文化的な価値を掘り出す段階に入ったばかりである。筆者は宗教建築と都市景観の依存関係を研究することによって中国政府と国民に歴史都市への保護意識を喚起できるように考えている。

最後に、本論では、岡崎の「聖地」としての性質に着目し、家康と徳川幕府体制による「聖地岡崎」の空間演出の実態について、今の段階で深く論及することはできていない。それぞれの宗教建築の内実や寺社の分布を統合して「聖地」を演出していった都市計画の哲学にまで目を向けることが今後の課題となる。

## 参考文献

### 日本語

- 柴田顕正編『岡崎市史』第二巻、岡崎市役所、1926。  
金井年『寺内町の歴史地理学的研究』、和泉書院、2004。  
外川淳『城下町・門前町・宿場町が分かる本』、日本実業出版社、2018。  
HGIS 研究協議会編『歴史 GIS の地平景観・環境・地域構造の復原に向けて』、勉誠出版、2012。  
愛知大学三遠南信地域連携研究センター編『地域研究のための空間データ分析入門』、古今書院、2020。  
岡崎市役所都市整備部都市計画課『岡崎の都市計画』、岡崎市ホームページ、2012。  
国土地理院地図編『1888-1898、1920、1959-1960、1968-1973、1984-1989、1992-1996、現在2万5千分の1の地形図』、アーカイブ閲覧システム、2021。  
谷謙二『今昔マップ on the map』アーカイブ閲覧システム、埼玉大学教育学部人文地理学研究室、2021。

### 中国語

- 亨利・皮雷納 (Henri Pirenne) 「ベルギー」《中世紀的城市》「翻訳版」、商務印書館、2000。  
王南等編《北京古建築地図集》、清華大学出版社、2011。

本稿は2020年度愛知大学中国交換研究員制度による助成を受けて執筆された。

付表1 絵図における宗教建築のまとめ (各時期の絵図により筆者作成)

総数	4	1	37	54	31
『日本古城絵図』1725-1868	『諸国城之図』製図不明	『水野末期絵図』	『本多絵図』	『日本城郭史資料』	
大林寺	松応寺	明神 (三嶋神社)	明神 (三嶋神社)	三島明神 (三嶋神社)	
松応寺		龍海院	龍海院	竜海寺 (龍海院)	
甲山六坊		万徳寺	万徳寺	大明神 (六所神社)	
婦山無量寺		六所神社	六所神社	明神 (消失)	
		安心院	安心院	白山 (白山神社)	
		成就院	成就院	天王 (地藏)	
		スハ (諏訪神社)	スハ (諏訪神社)	宗持寺 (東へ移転、今は西岸寺)	
		光円寺 (光圓寺)	光円寺 (光圓寺)	寺 (今は老人ホーム)	
		白山 (白山神社)	白山 (白山神社)	西性寺	
		持仏堂	持仏堂	寺 (岡崎市役所)	
		天王	天王	随念寺	
		白山 (白山神社)	白山 (白山神社)	宝福寺	
		十王 (十王寺)	十王 (十王寺)	誓願寺	
		大林寺	大林寺	多宝坊 (岡崎市民会館)	
		満性寺	満性寺	定光坊 (岡崎市民会館)	
		総持尼寺	総持尼寺	極楽坊 (秋葉堂)	
		専福寺	専福寺	寺 (甲山寺)	
		善立寺	善立寺	寺 (薬師寺)	
		西照寺	西照寺	寺 (消失)	
		十王 (十王寺) 東側	十王 (十王寺) 東側	寺 (一乗寺)	
		円頓寺	円頓寺	密祥房 (密祥坊、消失)	
		随念寺	随念寺	花蔵房 (花蔵坊、消失)	
		宝福寺	宝福寺	寺 (源空寺)	
		誓願寺	誓願寺	寺 (消失)	
		天神 (岡崎天満宮)	天神 (岡崎天満宮)	寺 (覚恩寺)	
		興蓮寺	興蓮寺	永泉寺	
		多宝坊	多宝坊	覚堅院 (消失)	
		定光坊	定光坊	大林寺	
		十輪院	十輪院	松応寺	
		八幡 (甲山八幡宮)	八幡 (甲山八幡宮)	明神 (能見神明宮)	
		東円院	東円院	八幡 (伊賀八幡)	
		薬師 (薬師寺)	薬師 (薬師寺)		
		密祥房 (密祥坊、消失)	密祥房 (密祥坊、消失)		
		花蔵房 (花蔵坊、消失)	花蔵房 (花蔵坊、消失)		
		源空寺	源空寺		
		覚恩寺	覚恩寺		
		松応寺	松応寺		
			天王 (西)		
			勝蓮寺		
			クンオン (消失)		
			地藏		
			朝日 (消失)		
			薬師 (城内)		
			ケイ雲寺 (消失)		
			若宮 (若宮神社)		
			大泉寺		
			極楽寺		
			観音寺		
			神明 (能見神明宮)		
			庚甲 (消失)		
			永泉寺		
			愛宕 (消失)		
			栄え寺 (消失)		
			伊賀八幡		

付表2 地形図における宗教建築のまとめ（各時期の地形図により筆者作成）

総数	37	44	57	63	未増加	63	68	未増加	68	87
1888-1898	1920	1959-1960	1968-1973	1976-1980	1984-1989	1992-1996	1996-現在			
六所神社	六所神社	六所神社	六所神社	六所神社	六所神社	六所神社	六所神社			
龍海院	龍海院	龍海院	龍海院	龍海院	龍海院	龍海院	龍海院			
神明宮	神明宮	神明宮	神明宮	神明宮	神明宮	神明宮	神明宮			
熊野神社	熊野神社	熊野神社	熊野神社	熊野神社	熊野神社	熊野神社	熊野神社			
三嶋神社	三嶋神社	三嶋神社	三嶋神社	三嶋神社	三嶋神社	三嶋神社	三嶋神社			
萬徳寺	萬徳寺	萬徳寺	萬徳寺	萬徳寺	萬徳寺	萬徳寺	萬徳寺			
光圓寺	光圓寺	光圓寺(表記なし)	光圓寺(表記なし)	光圓寺(表記なし)	光圓寺(表記なし)	光圓寺(表記なし)	光圓寺(表記なし)			
諏訪神社	諏訪神社	諏訪神社	諏訪神社	諏訪神社	諏訪神社	諏訪神社	諏訪神社			
龍城神社	龍城神社	龍城神社	龍城神社	龍城神社	龍城神社	龍城神社	龍城神社			
大林寺	大林寺	大林寺	大林寺	大林寺	大林寺	大林寺	大林寺			
満性寺	満性寺	満性寺	満性寺	満性寺	満性寺	満性寺	満性寺			
西照寺	西照寺	西照寺	西照寺	西照寺	西照寺	西照寺	西照寺			
善立寺	善立寺	善立寺	善立寺	善立寺	善立寺	善立寺	善立寺			
誓願寺	誓願寺	誓願寺	誓願寺	誓願寺	誓願寺	誓願寺	誓願寺			
随念寺	随念寺	随念寺	随念寺	随念寺	随念寺	随念寺	随念寺			
若宮八幡宮	若宮八幡宮	若宮八幡宮	若宮八幡宮	若宮八幡宮	若宮八幡宮	若宮八幡宮	若宮八幡宮			
岡崎天満宮	岡崎天満宮	岡崎天満宮	岡崎天満宮	岡崎天満宮	岡崎天満宮	岡崎天満宮	岡崎天満宮			
極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺	極楽寺			
大泉寺	大泉寺	大泉寺	大泉寺	大泉寺	大泉寺	大泉寺	大泉寺			
八柱神社	八柱神社	八柱神社	八柱神社	八柱神社	八柱神社	八柱神社	八柱神社			
源空寺	源空寺	源空寺	源空寺	源空寺	源空寺	源空寺	源空寺			
松応寺	松応寺	松応寺	松応寺	松応寺	松応寺	松応寺	松応寺			
永泉寺	永泉寺	永泉寺	永泉寺	永泉寺	永泉寺	永泉寺	永泉寺			
寺	寺	寺(消失)	寺(消失)	寺(消失)	寺(消失)	寺(消失)	寺(消失)			
見松山観音寺	見松山観音寺	見松山観音寺	見松山観音寺	見松山観音寺	見松山観音寺	見松山観音寺	見松山観音寺			
能見神明宮	能見神明宮	能見神明宮	能見神明宮	能見神明宮	能見神明宮	能見神明宮	能見神明宮			
伊賀八幡宮	伊賀八幡宮	伊賀八幡宮	伊賀八幡宮	伊賀八幡宮	伊賀八幡宮	伊賀八幡宮	伊賀八幡宮			
稲前神社	稲前神社	稲前神社	稲前神社	稲前神社	稲前神社	稲前神社	稲前神社			
明願寺	明願寺	明願寺	明願寺	明願寺	明願寺	明願寺	明願寺			
泉龍寺	泉龍寺	泉龍寺	泉龍寺	泉龍寺	泉龍寺	泉龍寺	泉龍寺			
西光寺	西光寺	西光寺	西光寺	西光寺	西光寺	西光寺	西光寺			
大樹寺	大樹寺	大樹寺	大樹寺	大樹寺	大樹寺	大樹寺	大樹寺			
鴨田神社	鴨田神社	鴨田神社	鴨田神社	鴨田神社	鴨田神社	鴨田神社	鴨田神社			
稲荷神社	稲荷神社	稲荷神社	稲荷神社	稲荷神社	稲荷神社	稲荷神社	稲荷神社			
善光寺堂	善光寺堂	善光寺堂	善光寺堂	善光寺堂	善光寺堂	善光寺堂	善光寺堂			
七所神社	七所神社	七所神社	七所神社	七所神社	七所神社	七所神社	七所神社			
八劍神社	八劍神社	八劍神社	八劍神社	八劍神社	八劍神社	八劍神社	八劍神社			
1920 新増加	新田白山神社 真宗大谷派 三河別院 徳王稲荷金刀比羅社 甲山八幡宮 法専寺 日吉神社 藪田八幡宮	新田白山神社 真宗大谷派 三河 別院 徳王稲荷金刀比羅 社(表記なし) 甲山八幡宮 法専寺 日吉神社 藪田八幡宮	新田白山神社 真宗大谷派 三河 別院 徳王稲荷金刀比羅 社 甲山八幡宮 法専寺 日吉神社 藪田八幡宮							
	1959-1960 新増加	菅生神社 浄土真宗三河別院 法光寺 総持尼寺 宝福寺 甲山寺 弘正寺 唯念寺 日名神明宮 持法院 慈雲寺	菅生神社 浄土真宗三河別院 法光寺 総持尼寺 宝福寺 甲山寺 弘正寺 唯念寺 日名神明宮 持法院 慈雲寺	菅生神社 浄土真宗三河別院 法光寺 総持尼寺 宝福寺 甲山寺 弘正寺 唯念寺 日名神明宮 持法院 慈雲寺	菅生神社 浄土真宗三河別院 法光寺 総持尼寺 宝福寺 甲山寺 弘正寺 唯念寺 日名神明宮 持法院 慈雲寺	菅生神社 浄土真宗三河別院 法光寺 総持尼寺 宝福寺 甲山寺 弘正寺 唯念寺 日名神明宮 持法院 慈雲寺	菅生神社 浄土真宗三河別院 法光寺 総持尼寺 宝福寺 甲山寺 弘正寺 唯念寺 日名神明宮 持法院 慈雲寺			

天満宮 大円寺 津嶋神社	天満宮 大円寺 津嶋神社	天満宮 大円寺 津嶋神社	天満宮 大円寺 津嶋神社	天満宮 大円寺 津嶋神社	天満宮 大円寺 津嶋神社
1968-1973 新増加	茶白山稲荷 神社 浄専寺 蓮馨寺 昌光律寺 上里神社	茶白山稲荷 神社 浄専寺 蓮馨寺 昌光律寺 上里神社	茶白山稲荷 神社 浄専寺 蓮馨寺 昌光律寺 上里神社	茶白山稲荷 神社 浄専寺 蓮馨寺 昌光律寺 上里神社	茶白山稲荷 神社 (消失) 浄専寺 蓮馨寺 昌光律寺 上里神社
		1984-1989 新増加	吉祥院 照雲寺 能見不動尊貞寺 善光寺岡崎別院 松林律院	吉祥院 照雲寺 能見不動尊貞寺 善光寺岡崎別院 松林律院	吉祥院 照雲寺 能見不動尊貞寺 善光寺岡崎別院 松林律院
				1996-現在 新増加	安心院(絵図あり、 表記しはじめ) 金剛寺 善光寺無量寺 永昌寺(絵図あり、 表記しはじめ) 恵美須神社 龍城地藏尊 教信寺 正一位田町稲荷 安養院 白山神社(絵図あ り、表記しはじめ) 十王寺(絵図あり、 表記しはじめ) 积尊寺 春日大明神 慈光寺 真如寺 殿神八幡宮 白山神社 五十猛神社 回向院 西光寺 身代わり地藏尊